

沖縄県八重山郡竹富町波照間

下田原貝塚 出土品展

平成 29 年度 沖縄県立埋蔵文化財センター 移動展



石垣市開催

〔会期〕平成 29 (2017) 年

9月 1 日㊈—10 日㊉

〔会場〕石垣市立八重山博物館

〔共催〕石垣市教育委員会

波照間島開催

〔会期〕平成 29 (2017) 年

9月 15 日㊈—17 日㊉

〔会場〕竹富町立波照間公民館

〔共催〕竹富町教育委員会

主催：沖縄県立埋蔵文化財センター

はじめに　－開催の趣旨と展示構成－

下田原貝塚ではじめて発掘調査が行われたのは、下田原貝塚発掘調査隊（団長：金関丈夫）による1954（昭和29）年の調査で、いまから63年前にさかのぼります。これに続き、1958（昭和33）年には早稲田大学八重山学術調査団（団長：滝口宏）による調査が行われ、その後、1983（昭和58）年～1985（昭和60）年には、沖縄県教育委員会による土地改良工事計画に伴う範囲確認の為、発掘調査が行われました。

これらの調査成果は、現在も沖縄の考古学史のなかで重要な位置づけとなっています。下田原貝塚は八重山考古学における文化期の名称「下田原期」としても使用されるとともに、この時期を代表する「下田原式土器」の様式遺跡となっています。

このように下田原貝塚は、先島諸島の先史文化はもとより、波照間島に生きたひとびとの土地利用やくらしを知る上で欠かすことのできない遺跡として、1956（昭和31）年に琉球政府埋蔵文化財として登録され、その後、1972（昭和47）年の本土復帰に伴い沖縄県指定文化財（史跡）として現地に保存されています。

また、沖縄県が発掘した出土品294点は、先島先史文化の様相を示す重要な資料として、2011（平成23）年に沖縄県有形文化財（考古資料）に指定されています。

今回の移動展は、波照間島最古の遺跡「下田原貝塚」の発掘成果を、波照間島や石垣島の皆様に公開する目的で開催します。展示の構成として、下田原貝塚から出土した資料を、①土器、②石器・石製品、③骨・貝製品、④自然遺物の4つのテーマに分け、当時の写真や図面とともに紹介します。

目 次

ごあいさつ	1
八重山諸島の考古学編年と文化のうつりかわり	2
波照間島の遺跡	4
下田原貝塚	6
層序	8
遺構	10
人工遺物	12
土器	13
石器	14
貝・骨製品	15
コラム1 下田原貝塚の思い出	16
自然遺物	17
コラム2 下田原貝塚の発掘調査中のできごと	18
指定名称・理由	20

【凡例】

1. この図録は、平成29年度沖縄県立埋蔵文化財センター移動展「下田原貝塚出土品展」を補完するものとして作成したものである。
2. 本展/パネル・図録は、沖縄県教育委員会1986『下田原貝塚・大泊浜貝塚－第1・2・3次発掘調査報告－』を基に作成した。
3. 展示・図録の企画・編集は仲座久宣が行い、パネル・図録の原稿執筆は下地傑（コラム1）、金城亀信（コラム2）、仲座久宣が担当した。
4. 現場の写真是当時の調査担当者が撮影し、出土遺物の写真是矢舟章浩が撮影した。
5. 本書に使用されている写真・図面等を印刷物等に利用する場合は、沖縄県立埋蔵文化財センターに問い合わせて許可を得ること。

ごあいさつ

いまから約3,800年前、八重山諸島に土器や石器をもちいる文化が花ひらきます。この時代は、日本の歴史では縄文時代後期にあたりますが、八重山諸島ではその影響を受けず、より南の地域にルーツを有するとされる固有の文化を展開します。

下田原期とよばれるこの時期には、ウシの角に似た突起をもつナベ形の土器を作成し、さまざまな形の石斧やドリルなどの石器を使っていました。そして地面に穴を掘り直接柱を立ててつくる住居、穴屋（あなや）にくらし、魚やイノシシなどを食料として屋外で調理を行っていました。また、貝や動物の骨でつくった利器や装飾品が多く出土しています。特に巻貝製のビーズの出土からすると、おしゃれにも気をつかっていたことがわかります。

このように下田原期の波照間島では、現代にも通ずるような豊かなくらしが営まれていたことが想定できます。しかし、波照間島は琉球石灰岩の島で、石器の原材料がとれないことと、食料としていたイノシシが生息していません。出土した石器やイノシシのほとんどは、遺跡の約25km北方に位置する西表島や石垣島から持ち込まれた可能性が高く、対岸の西表島とひんぱんに往来來していたことがわかります。

遺跡から出土する石器のなかには、ノミ状の片刃石斧も含まれることから、舟を製作していた可能性もあり、そこから当時の造船技術の存在と、航海技術の高さをうかがい知ることができます。

この下田原期の文化を代表する出土品は発掘以来、沖縄県教育委員会文化課をへて沖縄県立埋蔵文化財センターで保管され、現在はその一部を同センターおよび沖縄県立博物館・美術館で常設展示がされています。しかしこれまで、出土品は両施設以外で展示公開する機会がありませんでした。本移動展は、下田原貝塚が所在する八重山諸島の波照間島、石垣島において、出土品の里帰り展示を行広く公開するとともに、地域の皆様に島の歴史・文化について、より理解を深めていただく目的で開催するものです。

この機会に、下田原貝塚が存在した当時の生活に思いをはせ、その魅力や価値を再認識していただければ幸いです。

2017（平成29）年9月

沖縄県立埋蔵文化財センター

所長 金城 龜信

八重山諸島の考古学編年と 文化のうつりかわり

宮古・八重山諸島を指す先島諸島の先史文化は、日本の歴史とは異なる道をあゆみます。この点の理解をより深めるため、事前に「時代のものさし」となる「編年」と「文化圏」のことを知っておく必要があります。

今から数千年前の沖縄には、異なるふたつの文化圏が存在していました。そのひとつは、奄美・沖縄諸島を範囲とする「北琉球文化圏」です。この文化は今から約6,600年前に始まり、南九州の縄文文化の影響を受けていると考えられています。しかし沖縄には、その後に続く弥生時代や古墳時代の文化は伝わらず、約1,000年前にグスク時代が始まるまで、しうりょうさいしゅう狩獵採集を中心とする生活が営まれていました。

これに対し宮古・八重山を含む先島諸島の先史文化は「南琉球文化圏」に属します。この文化は縄文文化や沖縄島周辺の影響を受けず、より南の地域に源流があるとされ、古くは今から約3,800年前に土器を使用する文化が開始されます（下田原期）。その後は、遺跡が未確認の空白期をはさんで、土器を用いない文化（無土器期）が現れ、新里村期（ゲスク時代相当）になると再び土器を用いる文化が開始されます。この新里村期を皮切りに、これまで別々の文化を営んできた両文化圏が統一されます。

このふたつの文化圏が存在した理由として、沖縄島と宮古島の間に広がる約



300kmにおよぶ広大な海域（ケラマ海裂）により、舟による島伝いの往来が難しかったことがあげられます。

このように、かつての北琉球文化圏と南琉球文化圏とでは、今では想像もつかないほど異なる文化が展開されていたのです。この南琉球文化圏を象徴するのが、下田原貝塚の出土品なのです。



900	1,000	1,100	1,200	1,300	1,400	1,500 (前期)	1,600	1,700	1,800	1,900	沖縄県
平安・平安並行時代											近現代
無土器期											1945 沖縄戦・日米戦争
900	1,000	1,100	1,200	1,300	1,400	1,500 (前期)	1,600	1,700	1,800	1,900	2000 現代統治開始
新里村期											1972 日本復帰
中森期											1972 現在
三山期											1972 現在
第二尚氏(前期)											1972 現在
近世後期											1972 現在
パナリ期											1972 現在
1429 第二尚氏の滅ぼし											1972 現在
1500 サケアカハチの乱											1972 現在
1602 魔界への昇進統治											1972 現在
1771 帝和の父生誕											1972 現在
1879 沖縄分離・廢藩置県											1972 現在
1945 沖縄戦・日米戦争											1972 現在
1972 日本復帰											1972 現在
2000 現在											1972 現在
1972 現在											1972 現在
1972 現在											1972 現在
1972 現在											1972 現在
1972 現在											1972 現在
1972 現在											1972 現在
1972 現在											1972 現在
1972 現在											1972 現在
1972 現在											1972 現在
1972 現在											1972 現在
1972 現在											1972 現在
1972 現在											1972 現在
1972 現在											1972 現在
1972 現在											1972 現在
1972 現在											1972 現在
1972 現在											1972 現在
1972 現在											1972 現在
1972 現在											1972 現在
1972 現在											1972 現在
1972 現在											1972 現在
1972 現在											1972 現在
1972 現在											1972 現在
1972 現在											1972 現在
1972 現在											1972 現在
1972 現在											1972 現在
1972 現在											1972 現在
1972 現在											1972 現在
1972 現在											1972 現在
1972 現在											1972 現在
1972 現在											1972 現在
1972 現在											1972 現在
1972 現在											1972 現在
1972 現在											1972 現在
1972 現在											1972 現在
1972 現在											1972 現在
1972 現在											1972 現在
1972 現在											1972 現在
1972 現在											1972 現在
1972 現在											1972 現在
1972 現在											1972 現在
1972 現在											1972 現在
1972 現在											1972 現在
1972 現在											1972 現在
1972 現在											1972 現在
1972 現在											1972 現在
1972 現在											1972 現在
1972 現在											1972 現在
1972 現在											1972 現在
1972 現在											1972 現在
1972 現在											1972 現在
1972 現在											1972 現在
1972 現在											1972 現在
1972 現在											1972 現在
1972 現在											1972 現在
1972 現在											1972 現在
1972 現在											1972 現在
1972 現在											1972 現在
1972 現在											1972 現在
1972 現在											1972 現在
1972 現在											1972 現在
1972 現在											1972 現在
1972 現在											1972 現在
1972 現在											1972 現在
1972 現在											1972 現在
1972 現在											1972 現在
1972 現在											1972 現在
1972 現在											1972 現在
1972 現在											1972 現在
1972 現在											1972 現在
1972 現在											1972 現在
1972 現在											1972 現在
1972 現在											1972 現在
1972 現在											1972 現在
1972 現在											1972 現在
1972 現在											1972 現在
1972 現在											1972 現在
1972 現在											1972 現在
1972 現在											1972 現在
1972 現在											1972 現在
197											

波照間島の遺跡

波照間島には、現時点で 16 遺跡が確認されています。その時期は、古くは今から約 3,800 年前の下田原期から無土器期、中森期、パナリ期までと幅広く、こんにちまで長期間にわたり、人々がくらし続けたことがわかります。

遺跡の多くは島の北西側に分布しており、その中でも先史時代（下田原期・無土器期）の遺跡は北海岸沿い、歴史時代（中森期・パナリ期）の遺跡は北西海岸と内陸部に集中する傾向があります。

遺跡の立地は、先史時代の下田原貝塚、大泊浜貝塚は海岸に面した石灰岩を覆う赤土（島尻マージ）上に堆積した砂丘に位置しています。その後、歴史時代に入ると内陸部の石灰岩丘陵上に立地するようになります。

先史時代の下田原貝塚・大泊浜貝塚が島の北岸に立地する理由として、遺跡の近くにわき水があること、前面に豊かな漁場となる海が広がること、その対岸には食料としたイノシシや石器の材料がとれる西表島が存在することがあげられます。



波照間島の遺跡位置図

波照間島の遺跡一覧（おおむねの年代は2・3ページの年表参照）

No	遺跡名	時期	主な遺構	主な遺物
1	しもたばるかいづか 下田原貝塚	下田原期	柱穴、炉跡、溝状遺構	土器、石器、骨・貝製品ほか
2	おおどまりはまかいづか 大泊浜貝塚	無土器期	礫床住居跡、炉跡、埋葬跡	陶磁器類、石鍋、骨 貝製品、鉄製品、人骨ほか
3	しもたばるじょうあと 下田原城跡	中森期	石積み、墓	土器、陶磁器類
4	でん むらあといせき 伝マシュク村跡遺跡	中森期	石積み	土器、陶磁器類
5	でん むらあといせき 伝シムス村跡遺跡	中森期	石積み、墓	土器、陶磁器類
6	みしゃくうたきしゅうへんいせき 美底御嶽周辺遺跡	中森期	拝所	土器、陶磁器類
7	きたがらくないいぶつさんぶち 北部落内遺物散布地	中森期	—	土器、陶磁器類
8	あらんとううたきしゅうへんいせき 新本御嶽周辺遺跡	中森期	拝所	土器、陶磁器類
9	ひーすくうたきしゅうへんいせき 大底御嶽周辺遺跡	中森期	拝所	土器、陶磁器類
10	でん せいたん ち 伝オヤケアカハチ生誕之地	中森期	—	土器、陶磁器類
11	でん むらあといせき 伝ウツオウ村跡遺跡	中森期	—	土器、陶磁器類
12	ないしうたきしゅうへんいせき 名右御嶽周辺遺跡	中森期	拝所	土器、陶磁器類
13	いせき イナサイ遺跡	中森期	—	土器、陶磁器類
14	ほたもりうたきしゅうへんいせき 保田盛御嶽周辺遺跡	中森期	拝所	土器、陶磁器類
15	でん むらあといせき 伝ヤグ村跡遺跡	中森期	井戸 火番盛（遠見番所跡）、墓	土器、陶磁器類
16	でん むらあといせき 伝ペーミシュク村跡遺跡	パナリ期	石積み	土器、陶磁器類
17	でん むらあといせき 伝ミシュク村跡遺跡	中森期	拝所、井戸、墓	土器、陶磁器類
18	コートマイ	パナリ期	火番盛（遠見番所跡）	

参考文献：沖縄県教育委員会1980『竹富町・与那国町の遺跡』沖縄県文化財調査報告書第29集 沖縄県教育委員会

下田原貝塚

下田原貝塚は、八重山諸島の竹富町波照間島の北岸、標高約3～9mに位置する下田原期（縄文後期相当）に位置づけられる遺跡です。

発掘調査は、1954（昭和29）年に学術調査として行われた下田原貝塚発掘調査隊（団長：金関 丈夫）による調査が最初で、いまから63年前にさかのぼります。これに続き、1958（昭和33）年には早稲田大学八重山学術調査団（団長：滝口 宏）による調査が行われます。

その後、土地改良計画に伴う範囲確認調査として、1983（昭和58）～1985（昭和60）年に沖縄県教育庁文化課により調査が行われました。その結果、柱穴や炉跡、溝状遺構が検出されるとともに、下田原式土器や石器、貝・骨製品など、八重山諸島に多くみられる遺物が多数出土しています。その年代は、放射性炭素年代測定により、今から約3,800年前という結果が得られています。本貝塚は先島諸島の先史文化を知る上で貴重な遺跡として、県の史跡に指定されています。



波照間島と下田原貝塚の位置



遺跡近景



調査状況

層序

遺跡の堆積は、のちの耕作や自然災害などでかきまぜられずに堆積した場合、下ほど古く上ほど新しいという「地層累重」の法則があります。

発掘調査では、遺跡の形成過程や時期、遺構や遺物の先後関係を知るため、地層を色や質感・混入物などにより分ける「分層作業」を行います。これに遺物包含層に含まれる土器形式や放射性炭素年代測定などの情報を加えると、地層を年代ごとに区分でき、時代の目盛りとして遺跡のうつりかわりを追うことができます。

これを「層序」といいますが、これまでの発掘調査により、下田原貝塚の中心部とされる第2地区の層序は次のとおりとなっています。

I層：暗褐色土で層厚20～25cm。畑の耕作により搅乱され遺物を多く含む。

II層：黒色土で層厚5～15cm。遺物包含層で土器片を多く含む。

III層：黒褐色土で層厚15～20cm。遺物包含層で土器のほか貝類、獸魚骨、焼石を多く含む。

IV層：暗褐色土で層厚5cm。遺物は少ない。

V層：赤褐色土で地山（最下層）にあたる。柱穴などの遺構が検出される。

このような考古学的な調査による情報とあわせ、遺跡のより詳細な年代を調べる目的で、出土した木炭と貝を試料として放射性炭素年代測定を行いました。その結果は次のとおりです。

①シ-58グリッド第III層（貝） 年代： $3,660 \pm 70$ y B·P（今から約3,700年前）

②シ-58 グリッド第III層（木炭） 年代： $3,740 \pm 85$ y B·P（今から約3,800年前）

この分析により、遺跡の主体となる第III層の年代が、今から約3,800年前であることが判明し、同じ層から出土する下田原式土器の年代を特定することができました。この結果から、沖縄諸島を中心とする北琉球文化圏や周辺諸国との比較研究が飛躍的に進展することになります。



堆積状況（第4地区 ケー76 グリッド南壁）



堆積状況（第2地区 コ・サ・シー59 グリッド東壁）

遺構

遺跡の発掘調査では、建物跡などの「遺構」が検出され、土器や石器などの「遺物」が出土します。これらの情報から、遺跡がどのような目的でその場所に作られ使われたのか、貝塚なのか集落やグスク（城跡）なのかといった「性格」を推定することができます。

下田原貝塚では、遺構として石を敷きつめた礫敷き遺構、柱穴、溝状の遺構を検出しました。これらの遺構は、当時の住居やそれに伴う施設であったと推定できます。この結果から、下田原貝塚は当時のひとたちがくらした居住域で、その広がりから集落（村）を形成していた可能性が考えられます。



溝状遺構検出状況



柱穴・炉跡検出状況



柱穴検出状況（壁面右手に土器）

人工遺物

遺跡から出土する土器や石器、陶磁器など道具類のほか、食料とした動物の骨や貝類のこととも「遺物」とよびます。このうち、土器や石器などのひとが作った遺物は「人工遺物」とよび、動物骨や貝類は「自然遺物」とよんでいます。

下田原貝塚からは、人工遺物として石器、土器、貝製品、骨製品が出土しています。

このうち土器は、下田原貝塚ではじめて発見されたことから「下田原式土器」と命名されており、八重山考古学における下田原期を代表する土器となっています。石器は石斧やドリル、すり石、たたき石などが出土しており、波照間島には産出しない石が用いられています。

その他、貝がらや動物の骨・牙を加工した道具やアクセサリーが多く出土しています。これらの組み合わせから、下田原貝塚のくらしの一端を推定することができます。



土器出土状況



石斧出土状況（埋納された石斧とサメ歯製品○）



石錐（ドリル）出土状況



クジラ製の骨製品出土状況

土 器

下田原式土器は、下田原貝塚を標準とする土器で、現時点^{ひょうしき}で八重山諸島と多良間島に限定して出土しています。その基本形としては、全体に厚手で底部から胴部への立ち上がりが丸い平底の鍋形をしていますが、口径が小さい筒型もあります。口縁は内湾、外反、直口の3種が出土しています。この内、外反・直口の土器は平口縁で、その下にはくぼみを巡らせる例があります。また、胴部には牛角状の突起が2ヶ所につき、まれに縦に沈線を数本引くものや、連続した爪形状の文様を有する例もみられます。この土器は南方からの伝播^{ちんぱ}が想定されていますが、現時点で明確な関連性が見いだせず、詳細はよくわかつていません。



土 器

石 器

下田原貝塚から出土した石器は、そのほとんどが実用品で、装飾品と思われる製品は含まれていません。その種別は多様で、石斧、利器（尖頭器、ノミ状利器、せきすい すわりし くぼみいし といし たたましいし せんとうき あんばん 石錐）磨石、凹石、石皿、砥石、敲石のほか、用途不明の円盤状製品が得られています。これら石器の大半を占めるのは石斧です。この石斧は刃部の形態から4種に分類がされています。また、本調査において石製利器が下田原期までさかのぼることが確認されました。

これら石器の石質は、斑レイ岩や輝緑岩がほとんどで、石皿及び砥石においてわずかに砂岩や花崗岩が用いられています。遺跡が立地する波照間島にはこれらの石材が分布しないことから、島の北側に位置する西表島などから持ち込まれたことが考えられます。



石 器

貝・骨製品

貝・骨製品には実用品と装飾品とがあり、両者とも豊富に得られています。貝製の実用品としては、スイジガイやクモガイの突起を加工した利器や、ヤコウガイ蓋の製品、シレナシジミ製利器のほか、イモガイ、ホラガイを加工した貝匙、リュウキュウサルボウ製の貝錐が得られています。装飾品では、タカラガイやイモガイなどを加工した垂飾品が得られています。

骨製品も実用品と装飾品があり、実用品としては主にイノシシの骨を加工した骨針、骨錐、ノミ状製品があります。次に装飾品としては、有孔の骨・牙製品があり、この素材としてイヌの歯やサメの椎骨、ウツボ科の顎の骨が用いられています。そのほか、実用・装飾の用途を併用するサメ歯製品が多数出土しています。

このように下田原貝塚からは、貝・骨製品がほかの下田原期の遺跡と比較して種類・量ともに多く出土している点でも重要な成果といえます。



貝・骨製品

コラム1

下田原貝塚の思い出



下地 傑

(石垣市立八重山博物館長)

当時、沖国大の考古学ゼミ生であった私が石垣島出身ということで金城亀信（当時県教育庁文化課専門員）さんから誘いがあり、夏季休暇中の短い期間であったが下田原貝塚の発掘調査に参加させて頂くことが出来た。30数年前の事である。夏休み期間の前半は大学の発掘実習で沖永良部島の神野貝塚の調査を終えてからの参加である。熱暑の中での発掘に体が慣れたころであったが、波照間島の暑さは想像以上であった。バテている私を横目に黙々と発掘を続ける作業員さん達の足を引っ張らないよう20代の私は必死であったことをよく覚えている。お屋の弁当も食が進まなかったが、現場監督の金武正紀さんが毎朝作ってくれることもあって残すわけにはいかなかった。

作業終了後は宿舎で出土遺物のチェックや明日の段取りなどを行うが、その間、見習いの私はタライと洗濯板での洗濯（初めての経験であった）が日課であった。その後は現場近くで金武さんが採集した野草〔キク科のノゲシや長命草（ボタンボウフウ）〕料理の手伝いとなるのである。米飯は無く、代わりに「米原料の幻の液体」がふんだんに食卓に上った。もちろん氷はない。

休日になると食性調査と称して港やニシの浜に竹竿を持ち出し、小魚や貝類を大量に捕獲しタンパク質の確保に努めた。また、ヤエヤマオオコウモリ捕獲作戦を企てたが実践できなかった。今ではじんばつつきぐいしゅ 準絶滅危惧種に指定されているらしい。調査の楽しい思い出である。

夏場の発掘調査は、台風の襲来を受け中断することが多い。その間は宿舎で出土遺物の洗浄や考察、発掘方法の検討などを行い今後の調査への英気を養う期間でもある。台風明けの調査区はプールとなっている場合が多く、水の汲み出しなど時間のロスになってしまい大迷惑であるが、下田原の場合は大変うれしいことがあった。雨水により崩落した壁面に大きめの土器片が顔を出していたのである。了解を得て壁を横掘りしたところ破片はどんどん大きくなり、唯一全形を窺い知ることができるものが出土したのである。それが後に考古資料初の県指定有形文化財となった復元品の土器である。あのときの感動は今も忘れられない。短期間の参加ではあったが下田原貝塚の発掘調査の経験は非常に有意義であったと同時に忘れない日々であった。

独特な先史文化を有する沖縄県の中にあって八重山諸島の先史文化はまだ特異であり、その多様性を如実に示す下田原貝塚出土資料は、そのルーツを初め後代の無土器期との関係など先史文化の研究に不可欠な資料であり、沖縄県を代表する考古資料として文化財に指定されたのは当然のことである。これからも考古学研究に大いに活用していくことだろう。

短い期間ではあったが発掘作業員の方々に大変お世話になりました。中でも家主の垣本茂家や宿舎に近い崎山三郎家には、夕食やお酒を度々御馳走になりました。心から感謝申し上げます。

追伸、不思議なことに、このコラムを依頼された後、崎山三郎さんの息子さんと一緒に初めてお会いする機会を得た。波照間島での私の思い出を語ったところ目を締めて喜んでおられた。波照間島での展示会をぜひ見に行きたいとの事である。

自然遺物

遺跡から出土する動物の骨や貝類を「自然遺物」といいます。下田原貝塚からは、動物骨として魚類、は虫類、鳥類、ほ乳類が出土しています。

おもな種を紹介すると、魚類ではブダイ科、ハリセンボン科が多く出土しています。は虫類ではウミガメ科が多く、鳥類はアホウドリやカラスが出土しています。ほ乳類はイノシシが多量に出土しており、下田原貝塚の主体となる食料であったことが考えられます。そのほか、コウモリ類やジュゴン、クジラ類が出土しており、多様な動物を食料としていたことがわかります。

この中で注目されるのは、イノシシ骨の出土です。イノシシは波照間島には棲息していないことから、遺跡の約25km北側に位置する西表島から持ち込まれた可能性があります。

貝類としては、チョウセンザザエ、マガキガイ、シャコガイ、シレナシジミなどが多く出土しています。貝類は棲息する場所が決まっていることから、それを調べることで当時のひとたちが、どの辺まで漁に出ていたのかを知ることができます。

出土した貝類の生息地は、潮間帯下の岩礁・サンゴ礁域が多いことから、おもにサンゴ礁域を漁場としていたことが考えられます。



イノシシ骨・貝類出土状況

コラム2 下田原貝塚の 発掘調査中のできごと



金城 龜信

(沖縄県立埋蔵文化財センター所長)

下田原貝塚の発掘調査は、第1次発掘調査〔1983(昭和58)年9月5日～11月5日〕、第2次発掘調査〔1984(昭和59)年5月28日～8月7日〕、第3次発掘調査〔1985(昭和60)年7月15日～8月25日〕までの3カ年間にわたり文化庁の補助を受けて実施しました。

発掘調査中は、発掘調査担当者の金武 正紀さん(元那覇市文化財課長)と筆者を中心に、発掘調査補助員として後仲筋 正徳さん(元石垣市教育委員会)と下地 傑さん(現石垣市立八重山博物館長)の協力を得て、3カ年間調査を行いました。

宿泊は、^{ふくら}富嘉集落の垣本 茂さんの一軒家を借りての自炊生活でした。初年度には宿舎にテレビはあるがNHKしか映らないので、洗濯用の竹製の物干し竿にアンテナを取り付け、台湾のテレビ番組数チャンネルを観ることができるようにしました。

現場では撮影用の脚立を購入する予算も無く、貝塚から検出された炉跡などの遺構撮影のため、波照間製糖の事業所まで借用にいきました。撮影の度に脚立を借用することが段々と申し訳なく感じてきたことから、道路沿いにある5・6メートル程度に成長したギンヌムをノコギリで7・8本切って撮影用の櫓を作製し、2カ年間使用しました。撮影用櫓の高さは3m程度あり、撮影時には西表島や石垣島までの眺望が可能となり、櫓も作業員2・3名で容易に移動することができました。

二年目の発掘調査の際に伊江島の具志原貝塚で緊急発掘調査が始まり、遺構実測の調査員が不足した為、私が一週間程度伊江島へ応援に行くことになりました。その間に、金武さんが急性の胃潰瘍となり石垣島から急患用ヘリを家主の垣本さんが要請し、石垣市内の県立病院でしばらく入院する事態が発生しました。私が伊江島から戻って、下田原貝塚の発掘調査を再開することになり、職場である県教育委員会文化課の埋蔵文化財係から岸本 義彦さん(元当センター調査班長)・盛本 純さん(元当センター副参事)・島 弘さん(現那覇市文化財課副参事)の3名が一週間程度、応援に来ました。ある日のこと、4名とも現場を終えて宿で夕食を済ませ就寝していましたが、朝早く家の中に子ヤギが入ってきました。岸本さんと私は目が覚めましたが、子ヤギが盛本さんの頭を前足で、2・3回コンコンと叩き、その後は島さんのお腹の上に乗って楽しそうに飛び跳ねていました。二人とも全く起きないので、岸本さんと私は笑い転げていました。



調査状況

三年目は、金武さんも発掘調査に復帰し、現場を進める事ができました。その当時、金武さんは
なきじんじょうあと、しじまじょう
今帰仁城跡の志慶真門地区発掘調査報告書の作成に際し、陶磁器の産地分類で頭を悩ませていました。
そこで金武さんは私の提案した分類方法を尊重して下さり、『今帰仁城跡発掘調査報告書（I）』
の青磁の産地分類 A 窯系・B 窯系の二つの窯が登場し、掲載されました。

調査期間中の3年間は、下田原貝塚の発掘調査の方法及び遺構の検討、他遺跡との検討などについて、金武さんや下地さんと泡波あわなみを飲みながら語らいました。この下田原貝塚の発掘調査では金武さんをはじめ、以下の16名の作業員の方々や協力者の皆さんのおかげで無事に終了することができました。ここに記して感謝の意を表します。

＜発掘作業員＞

垣本 茂・垣本 初枝・野原 豊・鳩間 末子・本比田 トミ・安里 アイ子

西元比田 トミ・崎枝 福子・美底 ヨシ・上盛 洋子・美底 初代・西波照間 千江子

西本 勝枝・米盛 玉子・金城 ミツ子・前野 ツネ

＜協力者＞

山田 均・石野 友三・南 正雄・大泊 善八・大泊 勇一・大泊 正一・前田盛 成幸の各氏（下田原貝塚や大泊浜貝塚の土地所有者）をはじめ、仲底 長幸（元町議会議員）、志喜屋 清（当時、竹富町立波照間中学校 教諭、平成16年3月石垣市立崎枝小学校校長退職）



波照間空港に到着（金武正紀さん）



台風後の水抜き作業状況



測量作業状況（筆者）



記録作業（筆者）

文化財指定の名称と理由 (下田原貝塚)

1 種 別 沖縄県指定有形文化財（考古資料）

2 名称及び員数 下田原貝塚出土品 土器 1 点
附土器片 85 点
石器 45 点
骨製品 26 点
貝製品 137 点

3 所 在 地 中頭郡西原町字上原193番地の7
沖縄県立埋蔵文化財センター

4 所 有 者 沖縄県

5 指定理由

(1) 基 準

沖縄県文化財の指定・認定・選定及び選択基準（昭和52年沖縄県教育委員会告示第4号）

第1 県指定有形文化財指定基準

5 考古資料の部

(1) 土器、石器、木器、骨角牙器、玉その他先史時代及びそれ以前の遺物で学術的価値の特に高いもの

(2) 指定をする理由

八重山郡竹富町字波照間小字下田原に所在する下田原貝塚から出土した考古資料である。下田原貝塚は、戦後の沖縄考古学の本格的な出発地となった遺跡であり、また先島先史時代編年の標識遺跡として位置づけられるなど、学史上重要な遺跡である。昭和31年10月19日には、遺跡の一部が琉球政府埋蔵文化財に指定された。

本指定物件は、史跡指定範囲地周辺部で発掘されたものである。出土地は史跡指定地の南東側に位置する。

資料の内訳は土器・石器・骨製品・貝製品で、今回指定するのは昭和58年から昭和60年の3ヶ年にわたって沖縄県教育委員会が発掘調査を実施した時の資料である。土器は破片資料が多い中で牛角状把手を持つ平底の鍋形土器が1個体得られ、初めて下田原式土器の全形が把握された資料となった。石器は局部磨製石斧を含む多様な石斧や敲石・磨石のほか、他遺跡では出土例の少ない小形の尖頭器類が出土している。骨製品及び貝製品は、豊富なバリエーションを示す骨針・骨鍾・イノシシ牙製品・サメ歯製品・螺蓋製敲打器・スイジガイ突起部加工品・貝垂飾品等がある点で注目される。

本件は、先島諸島における先史時代の文化様相を端的に示す好資料であるとともに、未だ解明されていない先島先史文化の起源や土器編年、及び文物の流入経路などを考える上で重要な資料であることから、指定し保存・継承を図る必要がある。

下田原貝塚出土品一覧 (294点)

土器一覧

種別 (合計)	製品名(分類)	部位	点数
土器 (86点)	下田原式土器 (A部 I 頭a)	口縁	13
	下田原式土器 (A部 II 頭a)	口縁	7
	下田原式土器 (A部 II 頭b)	口縁	2
	下田原式土器 (A部 II 頭c)	口縁	7
	下田原式土器 (A部 II 頭d)	口縁	17
	下田原式土器 (B部 I 頭)	口縁	5
	下田原式土器 (B部 I 頭b)	口縁	2
	下田原式土器 (B部 II 頭a)	口縁	1
	下田原式土器 (B部 II 頭b)	口縁	6
	下田原式土器 (B部 II 頭c)	口縁	2
	下田原式土器 (B部 II 頭d)	口縁	1
	下田原式土器 (A部把手)	把手	6
	下田原式土器 (B部把手)	把手	4
	下田原式土器 (B部把手)	把手	2
	下田原式土器 (A部底部)	底部	9
	下田原式土器 (B部底部)	底部	2
	下田原式土器 (A部のあら盤)	底部	1

貝製品一覧

種別 (合計)	製品名(分類)	点数
ヤコウガイの巻製貝刃 (Vタイプ)	1	
ヤコウガイの巻製貝刃 (VIタイプ)	2	
ヤコウガイの巻製貝刃 (VIIタイプ)	1	
ヤコウガイの巻製貝刃 (VIIIタイプ)	2	
ヤコウガイの巻製貝刃 (IXタイプ)	1	
ヤコウガイの巻製貝刃 (Xタイプ)	1	
シレナジミ製貝道具 (貝刃)	1	
シレナジミ製貝道具 (利劍)	1	
シレナジミ製貝道具 (貝底)	5	
シレナジミ製貝道具 (ホライ)	2	
貝飴 (ココラブ)	1	
貝飴 (イモガイ科製)	1	
貝飴 (シコガタ製)	1	
貝飴 (オオベッコウガサガイ製)	1	
貝飴 (タラバガニ製)	1	
貝飴 (アヒル卵形)	6	
イモガイ科製垂飾品 (Iタイプ)	1	
イモガイ科製垂飾品 (IIタイプ)	2	
イモガイ科製垂飾品 (IIIタイプ)	2	
イモガイ科製垂飾品 (IVタイプ)	2	
イモガイ科製垂飾品 (Vタイプ)	9	
垂貝科製垂飾品 (Iタイプ)	19	
垂貝科製垂飾品 (IIタイプ)	4	
垂貝科製垂飾品 (IIIタイプ)	1	
垂貝科製垂飾品 (IVタイプ)	1	
垂貝科製垂飾品 (Vタイプ)	3	
垂貝科製垂飾品 (VIタイプ)	7	
垂貝科製垂飾品 (VIIタイプ)	2	
垂貝科製垂飾品 (VIIIタイプ)	1	
二枚貝有孔製品 (シレナジミ製)	1	
二枚貝有孔製品 (ヒメジャコ製)	1	
二枚貝有孔製品 (ワタラヌリガイ製・右側)	18	
二枚貝有孔製品 (ワタラヌリガイ製・左側)	25	
スイジガニ製利器 (貝状突起a)	6	
スイジガニ製利器 (貝状突起b)	1	
スイジガニ製利器 (貝状突起c)	1	
ケモガニ製利器	1	

石器一覧

種別 (合計)	製品名(分類)	点数
石器 (45点)	石斧 (小石斧)	3
	石斧 (中石斧)	3
	石斧 (大石斧)	1
	石斧 (小石斧)	2
	石斧 (巨石斧)	6
	石斧 (大型)	2
	石矛 (小石矛)	4
	石矛 (大型)	1
	石未成品	1
	石刀	1
	石刀器	1
	石刀柄用品	4
	火頭器	2
	鑿狀利器	1
	石錐	3
	磨石 (結晶片岩)	1
	磨石 (砂岩)	1
	磨石 (花崗岩)	1
	磨石 (角閃石岩)	1
	磨石 (石英斑砂岩)	1
	磨石 (石英岩)	1
	凹み石	1
	石皿	1
	燧石	1
	敲击石	1
	円錐形石器	1

半製品名及び分類は報告書の記載に準じた。
実測図及び写真は報告書に対応している。

<報告書>

沖縄県文化財調査報告書第74集
「下田原貝塚—大泊浜貝塚—1・2・3次
発掘調査報告」

沖縄県教育委員会 昭和61(1986)年3月

骨製品一覧

種別 (合計)	製品名(分類)	点数
骨製品 (26点)	骨針	3
	骨鍬	2
	イノシシ牙製尖状品	4
	イノシシ牙製ノミ	1
	サメ歯製品 (Aタイプ)	1
	サメ歯製品 (Bタイプ)	1
	サメ歯製品 (C aタイプ)	1
	サメ歯製品 (C bタイプ)	2
	サメ歯製品 (D aタイプ)	1
	サメ歯製品 (D bタイプ)	3
	イノシシ牙製品	1
	有孔イヌ牙製品	1
	有孔椎骨製品	1
	ツツボ有孔椎骨製品	1
	用途不明	2
	その他	1

貝製品 (137点)	部位	点数
貝製品		
イモガニ科製垂飾品 (Iタイプ)	1	
イモガニ科製垂飾品 (IIタイプ)	2	
イモガニ科製垂飾品 (IIIタイプ)	2	
イモガニ科製垂飾品 (IVタイプ)	2	
イモガニ科製垂飾品 (Vタイプ)	9	
垂貝科製垂飾品 (Iタイプ)	19	
垂貝科製垂飾品 (IIタイプ)	4	
垂貝科製垂飾品 (IIIタイプ)	1	
垂貝科製垂飾品 (IVタイプ)	1	
垂貝科製垂飾品 (Vタイプ)	1	
垂貝科製垂飾品 (VIタイプ)	3	
垂貝科製垂飾品 (VIIタイプ)	7	
垂貝科製垂飾品 (VIIIタイプ)	2	
二枚貝有孔製品 (シレナジミ製)	1	
二枚貝有孔製品 (ヒメジャコ製)	1	
二枚貝有孔製品 (ワタラヌリガイ製・右側)	18	
二枚貝有孔製品 (ワタラヌリガイ製・左側)	25	
スイジガニ製利器 (貝状突起a)	6	
スイジガニ製利器 (貝状突起b)	1	
スイジガニ製利器 (貝状突起c)	1	
ケモガニ製利器	1	



下田原貝塚出土品

関連行事のご案内

文化講座

「下田原貝塚の調査について」

講 師 金城 龜信

(沖縄県立埋蔵文化財センター所長)

日 時 平成 29 年 9 月 16 日 ㈯ 19:00 ~

会 場 波照間農村集落センター

定 員 200 名 予約不要・参加無料



平成 29 年度 沖縄県立埋蔵文化財センター移動展

「下田原貝塚出土品展」

発行年月日：2017（平成 29）年 9 月 1 日

編集・発行：沖縄県立埋蔵文化財センター

〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原 193-7

TEL 098-835-8751 FAX 098-835-8754

H P <http://www.pref.okinawa.jp/edu>